

## 審査の結果の要旨

氏名 橘高 佳恵

本研究の目的は、1960年代から1990年代におけるアメリカ合衆国の進歩主義教育の歴史を、子ども中心主義の系譜の再興、発展、衰退の過程を中心に描き、その知性的で革新的な性質を示すことにある。そのために本研究は、進歩主義教育を中心的に担った教育者たちの著書、文書、講演記録、活動記録を渉猟し、その実践と思想を描き出した。

本論文は序章、1章から5章の本論、終章で構成されている。序章では、進歩主義教育および子ども中心主義の定義が行われるとともに、進歩主義教育を支えた5名の教育者と、そのネットワークが、本研究の検討の対象として設定されている。

第1章では、アメリカの政治社会的文脈に即して、1960年代から1990年代における進歩主義教育の展開が記述されている。1960年代半ばに誕生したオープンエデュケーション運動は、1970年代半ばまでに衰退したが、子ども中心主義を中心的に担っていた人々は実践と理論を発展させた。しかし1990年代には、スタンダードとアカウンタビリティに基づくアウトカム重視の政策と、担い手の高齢化によって、進歩主義教育は衰退する。

第2章では、1960年代の進歩主義教育の再興を担ったリリアン・ウェーバーの実践とディスコースが検討された。ウェーバーは、イギリスでインフォーマル・エデュケーションを研究し、帰国後に公立学校の改革に携わる。彼女は、子どもが世界を探求し、意味を創造する働きを学びとして捉え、その学びに子どもの知性の発揮を見出した。

第3章では、実験的な独立学校であるプロスペクト・スクールを創設し、子どもへのオルタナティブなアプローチを求めたパトリシア・カリーニの実践と思想が記述された。カリーニは、子どもとものごとをよりよく見るための記述的探究と呼ばれるプロセスを生み出し、子どもが制作し、遊び、物語ることにその知性を見出した。

第4章では、進歩主義教育者の中核的なネットワークであるノースダコタ評価研究グループの創設と変容の過程が、コーディネーターのヴィット・ペロンの活動に着目して記述されている。ネットワークのミーティングは、評準テスト使用の拡大に対する保護者の危機感を背景とし、ペロンの呼びかけによって始まった。そして資料の共有、モノグラフ・シリーズの出版、年次ミーティングといった活動を通して進歩主義教育の発展を支えた。

第5章では、デボラ・マイヤーの学校設立の試みが記述され、その哲学が検討された。マイヤーは1974年にセントラル・パーク・イースト小学校を、1985年にセントラル・パーク・イースト中等学校を設立し、進歩主義の公立学校を実現させた。彼女にとって、公教育の目的は民主主義を担う知性的な大人の育成にあり、民主主義の習慣は知性的に協同する大人の中で培われる。その学校は大人と子どもが知性的に協同する共同体であった。

終章では、進歩主義教育が、子どもと教師がともに世界の意味を創造するという意味で知性的であり、人種民族のおよび社会経済的な平等を追求したという点で革新的であったことが示された。またその民主主義のヴィジョンが、すべての人が知性を行行使し、同等の権利を有する市民として意思決定に参加する社会であったと結論づけられた。

本論文は、丹念な史料調査と緻密な記述によって、1960年代から1990年代におけるアメリカの進歩主義教育の展開過程と、その歴史的な意義を解明した。この時期の進歩主義教育についての初めての本格的な研究として、優れた学術的貢献を達成している。よって本論文は、博士(教育学)の学位を授与するに十分にふさわしい水準にあると判断された。